

## 海の幸、木の恵み

辻 憲男（文学部教授）

淡路島の西浦、野島崎の沖に鹿ノ瀬という好漁場がある。水深2～20メートル、東西7キロ余の浅瀬で、春先のイカナゴや、タイ、ハマチ、スズキ、タコなどがよくとれる。山部赤人の万葉歌にも、「海（わた）の底沖つ岩礁（いくり）」と歌われた。古代の淡路は、内海の豊富な魚介を贄（にえ）として献上する「御食（みけ）つ国（くに）」であった。

『播磨国風土記』の逸文によると、仁徳天皇の時代（5世紀前半）、明石の御井のほとりにクスノキの巨木があり、朝日がさすとその影は淡路島を覆い、夕日の影は遠く生駒山地まで隠した。そこでこれを切って舟につくり、朝夕に清水を難波（なにわ）の宮まで運ばせた。その速いことは飛ぶ鳥のよう、ひと漕ぎで七つの波を越えたので、速鳥と名づけた。同じ話は古事記にもあり、続きに、舟が壊れたので、その木で塩を焼き、その焼け残りで琴をつくったら、楽の音が遠くの村々まで鳴り響いた。まるで玉の触れあう音のようにさらさらと、由良の岩礁にゆらぐ藻のようにさやさやと…。由良は今の和歌山との間の紀淡海峡、高速艇の名は軽野といった。

一見荒唐無稽の話のようだが、ここに不思議を語る古代人の心意が見えている。聖なる巨木には神霊が宿り、舟や琴に形を変えて奇跡を起こし、あるいは幸福をもたらすのである。しかり、「花咲かじいさん」の犬の桜も、あの『となりのトトロ』の大クスノキも、根は同じ恵みの神木であった。



淡路島の東南端、兵庫県洲本市由良。